



・流域圏担い手づくり事例集Ⅲで取り上げた「学童保育木造化プロジェクト」と同事例集Ⅳで取り上げた「錦二丁目都市の木質化プロジェクト」は、流域材（ここでは流域の人工林の木材）の利用が川上から川下の人をつなげ、幸せにした事例で、このような取組を広げたいという意識が共有された。

ex. 名古屋の学童保育木造化のための木材を提供してくれた額田の山主さんたちは、自分たちの山の木がどうなるかを見ることがほぼないので、木造化された学童で子どもたちが本当に喜んでいるのを見て、2階のテラスへ上るための立派な絞り丸太を学童にプレゼントした。

・流域材の利用は、川下に住む都市住民に森林の公益的機能や水源域のコミュニティ存続の重要性についての関心や知識を高めてもらい、川上と川下の住民の交流、流域内フェアトレードを進めるきっかけとなる。また、Jクレジット等を介し、民間企業が流域内の林業や山村の活性化に寄与することにもつながる。

・一方で、流域材を利用するには伐採・搬出・加工・流通までコストがかかるため、木材利用ありきで伐採を行うことは、人工林整備に必要不可欠な間伐の推進にブレーキをかけるという側面もある。

- ・人工林の間伐 → 森林の公益的機能の向上（災害リスク軽減、緑のダム機能向上）
生態系サービスの向上（生物多様性の向上、獣害の軽減？）
- 流域材利用 → 上下流住民の交流、流域内フェアトレード、企業の流域内林業への参入

<<トレードオフにさせず、両立させる方法はないだろうか？

間伐を最大限推進しつつ、流域材の生産・利用も促進する方策はないか？>>



・上記の課題について、木づかいガイドラインと山村ミーティングの合同テーマとして議論し、勉強会を複数回開催して問題を整理し、流域圏懇談会山部会としての提言につなげられないか。

*'25.9.5 に有志メンバーが百経で行ったブレインストーミングで出た意見

>都市の木質化プロジェクト取材の際、名大の山崎先生が、「人は何かをしなくてはいけないということではお金を払わないが、幸せだとお金を払う。木材利用についても、日本人は不燃材や防腐剤など技術開発ばかりを進める傾向があるが、木材を使って幸せだと一般の人が思えないと、木材利用は進まない」と言っていた。流域材を使うことが流域住民の幸せにつながるという考え方の部分

が一番浸透していない。

> 流域材利用の意義をダイレクトにユーザーに伝えるのは難しい。まず心ある建築家や工務店にアクセスすると良い。

> 木造建築のエキスパートの建築家すら、森の問題のことを意外に知らない。木なら良い、国産材なら良いという訳ではないことを伝える。いくらで売れば山にお金が戻るのか。

> 額田の「りたうっど」は無節の高級材を売りにしている。出材者、加工流通業者らのコーディネーター、戦略が必要。建築物には住宅、非住宅、商業施設などがある。新築だけでなく、内装や外装を木質化するというやり方もある。こういう材でこういうことができますよ、ということが示せると良い。名古屋の木造化された学童保育、伏見のスペース七番、ここ百経もモデルハウスになるか。

> 流域材利用の成果と課題についてまとめ、共有すると良い。森づくりや流域管理の考え方も踏まえて、中期目標、長期目標を段階的に考えると良い。課題については優先順位をつけ、すぐに解決が難しいものはペンディングに。

> 関係者に思いを語ってもらい、その後意見交換をする、フラクなおしゃべり会をする。話題提供者の候補は豊田市森林課の小山剛さん、森林資源の評価をしてきた（有）ウッズの能口秀一さん、飯田市の建築家、新井建築工房の新井さん、名古屋市緑区大高の紬建築、恵那市の佐合木材の今泉史雄さんなど。